

高島聡子〔著〕

**家裁調査官,こころの森を歩く**

——離婚,親権,面会交流,そして少年非行

四六判並製・日本評論社

2024年11月刊

定価1,980円(税込)

評者=門本 泉(大正大学)



そっけないほどの副題は、まさしく本書の要約であり、タイトルは、法という羅針盤をもって人間に寄りそう著者の職業的生きざまである。

著者の高島氏は、ベテランの家裁調査官である。「家庭裁判所調査官」(こちらの方が正式な名称である)は、裁判所で働く対人援助職で、家庭内の紛争、あるいは家庭や家族にまつわるさまざまな問題(家事事件)、そして非行少年の審判(少年事件)に係る調査を行う。法の権威を背景にして、人間の心にかかわるこの仕事は、法律に基づくが法律以外のものも大切にする使命を担っている。支援対象者は、往々にして自発的来談意思を持たず、かつ彼らの抱える問題は実に多様で、そして彼らは何かに「困っている」。著者は自身の仕事を、暗い森を旅する人にとって先を照らすランプのようなものと述べている。なるほど、家族とは森のようなものだ。強く、広く、濃く、私たちの人生、否、命に広範かつ深淵な影響を及ぼす。私たちを育て、守り、看取る。それだけに、時に私たちを迷わせ、苦しめ、脅かし、悲しませ、傷つける。そして、何かの拍子で、いとも簡単に壊れてしまうこともある。

本書では、こうした家族の支援に携わる現役の家裁調査官の実務が描写され、論じられている。挿話や(架空)ケースがふんだんに紹介され、時には大胆に切り込んでケース理解や介入が描写されていて、ぐんぐんと引き込まれる。これから進路を決めるステージにいる若い人たちにとっては、司法領域の心理支援について具体的に学ぶことができる内容になっている。時々、法の世界の専門用語も登場するが、どれも簡潔に説明されているので読者は困ることはないだろう。また、家裁調査官同士のやりとり、担当した非行少年とのやりとりなどはコミカルな場面もあり、思わずくすっと笑いたくなる。現場の息遣いが感じられる。

ところが、そんなふうに油断していると、急に喉の奥が苦しくなって泣きそうになる。しばしページから

目を離し、身体の内奥の情動がじんわり風になるのを待つことになる。切れ味のよい叙事体の中に込められた深い人生の意味、現実の厳しさ、複雑な事情、どうにもならぬ人間関係のもつれや苦悩を読み取らずにはいられない。「父母は深々と頭を下げ、そのまましばらく動かなかった」などという表現からは、文字数をはるかに超えた意味を受け取れる。いちいち解説しないところが、また素晴らしい。その意味では、ベテランの心理臨床家にも、読み応え(落涙<sup>ごた</sup>堪え)がある一冊である。

司法の心理支援は、共感とか肯定的関心といった言葉では表現しきれない部分も多い。そして裁判所では、「中立公正」が職能として極めて重要な態度とみなされている。しかし、これは冷たいとか感情を挿しはさまないといった一般のイメージとは違うのだ。むしろ真逆であり、かくも熱い行為であることを感じ取れる良書である。